

Public Arts 18 Views in AINO

袋井市 愛野 パブリックアート 18景



元慶煥 (韓国)
17の旗
Kyung-Hwan Won (KOREA)
17 Flags
●8200×5200×5200 ステンレス

最も高い2本の柱はワールドカップ2002韓国・日本を表し、全体の形状は袋井市の“F”、またスポーツのシンボルとしてのフラッグ(旗)の“F”をかたどったものです。前後の斜めのラインはスタジアムや愛野駅を取り巻く低い山々を描いており、伸び上がる柱はイベントの成功と袋井市の繁栄を祈願しています。



眞板雅文 (日本)
悠久のいとなみ 2002
Masafumi Maita (JAPAN)
The Eternal 2002
●7000×5200φ 鉄

長い里山での生活から得た経験をもとに、作家は自然や人間の、周囲の環境との融合をテーマとして制作しています。作品を構成する格子状の金属の中を、風が通り過ぎていきます。作品には、年ごとに足下に植えられた蔦が成長し絡まっていくことで変化がもたらされます。季節が変わるごとに蔦の色が変化し、作品も植物の力を借りて成長を続けます。



アルフレッド・ジャー (チリ)
人生劇場
Alfredo Jaar (CHILE)
The Spectacle of Life
●2600×6720×3640
鉄筋コンクリート、樹脂製イス(既製品)、ステンレス

私たちはスペクタクル(大掛かりな見世物)の社会に生きています。今日、スポーツもエンターテインメント性の追求や国家間の競争意識などによって焦点をずらされています。作品には、年ごとに足下に植えられた蔦が成長し絡まっていくことで変化がもたらされます。季節が変わるごとに蔦の色が変化し、作品も植物の力を借りて成長を続けます。



ヴィト・アコンチ (アメリカ)
メビウスソファ
Vito Acconci (UNITED STATES)
Möbius Sofa
●1100×4100×4500 強化プラスチック

作家は詩人としての活躍のあと、パフォーマンスなどで美術の見方や常識を変えるような活動を行ってきました。やがてパフォーマンスの場の装置に関心が移り、現在では空間そのものを変容するような作品をつくっています。ここにある作品は、循環し続けるメビウスの輪をベンチにするもので、造形的に美しいばかりではなく、数学的で不思議な空間を楽しむことができます。



リチャード・ウィルソン (イングランド)
ファイナルコーナー, 2002
Richard Wilson (ENGLAND)
Final Corner, 2002
●各260×550φ 強化ガラス、ポリカーボネート、LED、旗

舗道のカーブに設置された17個のステンレス楕円形ユニットは、夜間ライトで光り、スタジアムへの行き帰りの人たちを取り込みます。ユニットにはそれぞれ、16回のワールドカップ決勝進出国(2ヶ国)の国旗が日本の折り紙を思わせる形の隠喩的な布製オブジェとなってガラスの下に封入されています。2002年のワールドカップ終了後、決勝進出を果たしたブラジルとドイツの2ヶ国の旗が17番目のユニットに納まり、この作品は完成されました。



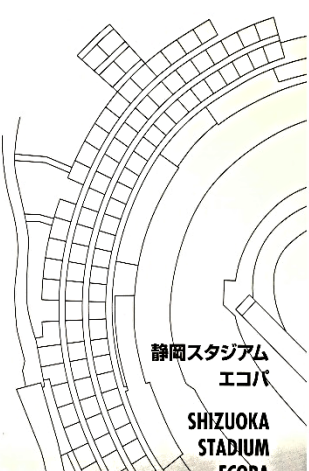
グラジアーノ・ボンピリ (イタリア)
川の風景
Graziano Pompli (ITALY)
River's Landscape
●350×2600×850 250×1300×850 白大理石

人間が自然の景観の中に作り出したものはどんなものでも、そこに長い間残り続けたものと思わせるほど周囲の環境と調和していなければならないと作家は考えます。この作品では、「家」によって人間が暗示され、「川」によって家が描かれています。川(自然)は岡や谷をつくり、時に家をも飲み込んでしまう。人の存在の痕跡さえも自然の中に溶け込んでゆくべきものであるということを示します。



フランク・スカルティ (フランス)
ワールドカップのためのモニュメント
Franck Scurti (FRANCE)
Monument for the World Cup
●2560×7560×2350
サッカーゴール(既製品)、ベンチ(既製品)

ゴールという非常に緊張感のある場と、ベンチというリラックスした場との対照的な状況がひとつの場所に表現されています。本来の機能から離れたサッカー・ゴールは日常風景の中に、作品を鑑賞する人が作品を構成するという面白い状況を生み出します。ゴールの中にいる人と外にいる人、そして少し楽しみながらその作品と人を見ている人との間に生じる鑑賞の倒置による効果です。



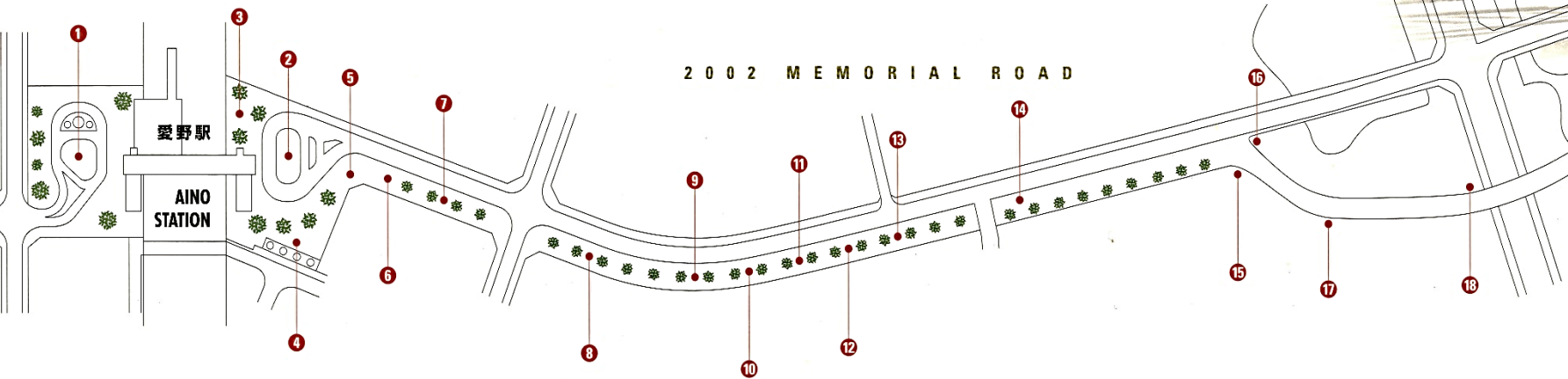
N55 (スウェーデン)
パブリックシングス
N55 (SWEDEN)
Public Things
●2600×6500×3000
ステンレスフレーム、ポリエチレンプラスチック製タンク、他

“パブリックシングス”は人々に公共の場を様々な形で利用できるようにしてくれます。このシステムはいくつかの機能を有し、利用したい人は誰でも使うことができます。公共の場であれば、道・広場・建物・公園・道端などどんな場面にも設置でき、誰でも“パブリックシングス”の使い方に自由に意見を述べることができます。アートでありながらコミュニティのコミュニケーションツールにもなります。



リカルド・デ・マルキ (イタリア)
インゴンブロ
Riccardo De Marchi (ITALY)
Ingombro
●1350×5000×450 ステンレス板

作品は無数の穴が開けられたステンレスの柱で構成されています。考える解釈としては、Scrittura del Nulla(「無のエクリチュール」=無の記述)、虚無、実体の欠如、不在などです。しかしその体積は一定ではなく、満ちることも空になることもあります。本作は、非存在と存在が交差する境界にあります。ゆえに「インゴンブロ」は、存在しない空間を支えるために作られた支点なのです。



ロベルト・ピリス (ウルグアイ)
太陽の舟 トリロジー
Roberto Piriz (URUGUAY)
Solar Ship — Trilogy
●H3000 木、スチールプレート

一番前にあり半月状の形を含む彫刻は船を表し、その“マスト”は天と地の間にあるものを統一するように存在します。半月部分は「渦巻き」であり、至高の統一への昇華、自然と起源への簡素で純粋な関係を表しています。作品形状は垂直方向に簡素から複雑に変化し、最終的に簡素へと行き着きます。彫刻は全体で三角形の象徴性を形成し、協働とチームワークというスポーツ精神の基本を表現します。



エルンスト・ヘッセ (ドイツ)
友人のための地球型フレーム (対話)
Ernst Hesse (GERMANY)
Global Frame for Friends (Dialogue)
●2720×5000×100 コールテン鋼

この作品では「使用者が友好に—対話する—彫刻」という提案がなされています。そばを通り過ると、楕円の大きさが変わっていくように見えます。一方、この彫刻は、その前かその後ろに立つ友達をきれいな写真に撮るための額縁にもなります。作品が切り取る風景は、自然であったり、伝統であったり、またそれと対極にある近代的なものであったりしますが、作者は、そのような異質な要素を作品を通して統合しようと試みています。



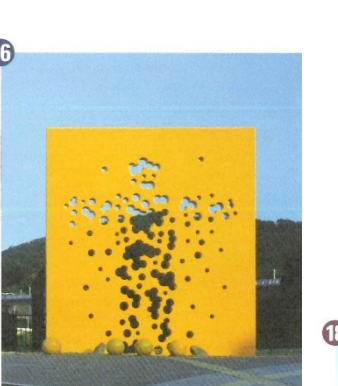
ヴェロニク・ジュマール (フランス)
鏡の木
Véronique Jourmad (FRANCE)
Mirrors Tree
●H4000 ステンレス/パイプ、カーミラー(既製品)

下部にベンチ、上部にコンベックス・ミラーを配したポール。人々はベンチで休憩したり、座りながら周りを囲む景色が複合されたイメージとなって映し出されるのを見ることができます。見かけと材料はシンプルで、円型の木製ベンチと、円柱状の着色されたポール上部にコンベックス・ミラーが樹木の葉のようにつけられた組み合わせとなっています。



シモン・ビール (スイス)
パラダイス—今、あなたがいるところ
Simon Beer (SWITZERLAND)
Paradise — is exactly where you are right now
●ヒマラヤスギ、丸太材、レンガ、他

愛野駅からエコパへ向かう道の途中の小さい丘にある穏やかな休息所。ベンチ、薪置き場、水飲み場のある空間の両脇には杉の木が植えてあります。よく見るとそこはスイスのキャンプ場にいるかのようで、突然、異文化へと招かれたような気持ちになります。発見や喜びは日々の中にあって、今いる場所こそがパラダイスであると作者は伝えています。



大岩オスカル幸男 (ブラジル)
空き地サッカークラブ
Oscar Satio Oiwa (BRAZIL)
Terreno Baldio F.C.
●5000×4500×300 鉄筋コンクリート、自然石

この作品は、作家がブラジルで過ごした少年時代の思い出です。サッカーをするためであれば、どこにでも近所の子どもたちがいつの間にか集まり、空き地や道路に二つの石を置いてゴールを決めて、夢中で遊びました。子どもたちが遊んだ場所はどこもボールの丸い土の跡だらけでした。



ホルヘ・イスマエル・ロドリゲス (メキシコ)
トウラチットリの競技者
Jorge Ismael Rodriguez (MEXICO)
Player of Tlachtlí
●1230×3500×1750 ブロンズ、コンクリート

私たちは今、激しいトウラチットリ(現在のメキシコの周辺地域で、古代インディオ文明の時代に盛だった競技)の練習の後で静かに休息を取る競技者の前にいます。伝説では神々がこの競技をたしなんだといわれています。敵と向かい合い二元性を持つことで、初めて「ひとつ」という概念が生まれます。つまり、神々がトウラチットリをプレーすることは、宇宙のバランスを保つことにつながっていたのです。スポーツはいつの時代も村々を、町を、また国々を友好によって結ぶために欠かせないものです。



ジャウマ・ブレナサ (スペイン)
マグリットの夢
Jaume Plensa (SPAIN)
Magritte's Dream
●2450×1600×1200 ステンレス板、強化ガラス

都会の風景は、人の魂からかけ離れて不透明で重い物質で埋めつくされ、そして私たちのいちばん壊れやすい部分を壁に押し込めてしまします。シュルレアリスムの画家のルネ・マグリットが秘密の場所から私たちの夢を見ていたように、この作品は高台の上から風景を眺めています。作品は、マグリットへのオマージュとなっていますが、作家が願っているのは、二つのベンチが他の人々と夢を分かち合えるきっかけになることです。